

学習を意味する倭語の原義

教育心理学研究室 木村俊夫

(昭和47年10月28日受理)

まえがき

倭語の習フ・真似フ・学フ・悟ル・知ルは、広義の学習を意味する。本稿は、此等の言葉の言語学的・語原学的研究である。成果は、日本人の学問観の源流を窺う手掛りになるかも知れない。しかし、本稿の直接の目的は、模倣・練習・学習・認知・会得、等の心理学的研究に対して問題を提起したり示唆を与えることにあった。

1 学問

1.1 ガクモン

正史における学問という字の初見は、日本書紀(720年)の「登₂遺₁学₁問₁」(崇峻元年)・「学₁問₁尼善信等」(崇峻3年)・「学₁問₁僧」(推古16年)・「学₁問₁者僧」(推古31年)等である。古事記(712年)と同様に音訓併読の紀の撰上当時の読み方の推定は、一般に極めて困難である。しかし、推古天皇15年(607年)に創建された法隆寺の正式の名称が法隆学問寺であり、この「学問」が「法隆」と同様に音読されたとすれば、紀の方も撰上当時はガクモンと音読されたかも知れない。

しかし、時代別国語大辞典上代編(以下²⁾時典)や古語辞典(以下³⁾辞典)はガクモンを収載していない。上代ないし古代には未だ国語化されていなかった、と考えられたからであろう。平安中期に入ってから、ガクモンは既に国語化され、枕草紙(11C初)や源氏物語(11C初)等の流麗な文章のなかにすんなりと収められている。中世に入ると、愚管抄(1220年)の「学₁問₁ハ僧ノ顕密ヲ学₁フモ、俗ノ紀伝・明経ヲナラフモ、コレヲ学₁スルニシタガヒテ、智解ニテソノ心ヲ得レバコソヲモシロクナリテ」(7)や、徒然草(1333年頃)の「人に勝らん事を思はば、ただ学₁問してその智を人に勝らんと思ふべし、道を学₁ぶとならば…、大きな職をも辞し、利をも捨つるは、ただ学₁問の力なり」(130)等に窺えるごとく、国語としてのみならず思想構成要素としても、十分に定着している。

愚管抄のガクモンはガクスルと等置され、マナブとナラフを包括する行動を意味する。徒然の初めのガクモン

は行動、終りのガクモンは主体化された学問、すなわち学識である。

1.2 モノナラフ

紀の「学₁問₁者僧」を釈日本紀(1302年)以下⁴⁾釈紀)はモノナラヒ(秘訓⁴)と訓んでいる。モノナラヒの初見は古今集(905年)の「この歌はむかしなまろをもろこしにものならはしにつかはしたりけるに」(の詞書⁴⁰⁶)であろう。この場合の用法は崇峻紀元年の場合と同様である。しかし、徒然の「ついでに物習ひ侍らん」(136)は、「しほという文字は、いずれの偏にか侍らん」という質問を通じて字を知る、というのが表面の意味である。

モノナラフという熟語は新しいが、モノもナラフも古語である。モノは万葉集(746年)以下⁵⁾万葉)に「可多美乃母能」(37)・「毛乃伊波受」(34)・「物念毛奈信」(296)等とあり、有形・無形の物件・事柄や情念・思考・言語等の行動の対象を意味した。ナラフは2・2で考察する。

2 学

2.1 ガク

学字の名詞的用法の初見は「若不_レ愛₂於₁学₁」(敏達元年)である。この「学」は学問あるいは学問することであろう。しかし、靈異記(823年)以下⁶⁾靈)の「何違_レ学₁不_レ孝₂於₁親母₁」(上²³)と同様に、音読されたという確証はない。近世以前に確かに音読されたと考えられるのは、天台の四弘誓願に見える「法門無尽誓願学」等は別として、開目抄(1272年)の「学₁・無学₁二千₁人」であろうか。ただしこの場合は未だ学問をし尽していない人を意味する。

動詞的用法の初見は、紀の「二神見而_レ学₁之」(神代上¹書)・「学₁其溺苦之状₁」(神代下¹書)・「習₂内教於…、学₂外典於…」(推古元年)等である。しかし、愚管抄の「内典・外典ノ文籍ハ…学₁スル人モナシ」(7)や、正法眼蔵随聞記(1237年)以下⁷⁾随聞記)の「昔の人は外典の学問も身を忘れて学₁するなり」(岩波文庫本⁸⁾の5)や徒然の「道を学₁する人」(92)の如

く音読されたという確証はない。

2・2 ナラフ

前掲の「学」(神代紀)と「習」(推古紀)を日本古典文学全集本(以下)は、ナラフ(神代紀下)・ナラヒ(神代紀上、推古紀元年)と訓んでいる。ナラフの初見は、霊の「鳥常啄效、毎日来候」(下)の訓注「效_比奈良_天」である。原文の文脈のなかでは、霊の方は広義の慣熟を意味する慣ラフの用例であるに対して、紀の方は広義の学習を意味する習ラフの用例である。後者の初見は前掲の「ものならはし」である。

ところで、類聚名義抄(以下)では、80数個の真名がナラフと訓まれている。もっとも、その半数は「並ブ」を意味する。残りは、第1系(学・習、等)、第2系(慣・狃・飢、等)および両系に通ずる第3系(似・遵、等)に大別される。

記紀に「訓_{高下}天云_此(記_上)」のような形で散見される「效_此」を、古事記伝(以下)は「效_此」(三、神一)としている。記伝は、霊の前掲訓注や釋紀の「效_此」(注音一)を参照したのであろう。この場合の效は前掲の遵と同義である。なお、名義抄がナラフと訓ませた効・効・倣は效と同一視されていたらしい。

上記の第3系を慣ラフと習ラフの同根性の反映と考えれば、学習に直接の関係があるとは見えぬ慣ラフの原義を尋ねる必要があろう。

2・2・1 慣ラフ

霊の「效」は、先行行動に後続行動が似ているという意味で同一の、「啄」という行動を反復する、という意味における慣ラフ(自動詞)であった。土佐日記(935年)の「(船旅に)をのこもならはぬは、いと心ほそし」や源氏の「ならひ給はぬ御歩き」(推本)等はこれである。

慣ラフとは、同一行動を反復体験することである。同一とは、先に後が似ており遵っていることを意味する。しかし、慣ラフにおいては、この行動の後続性や類似性・遵先性は前面に現われない。なお、類似性・遵先性は先・後を覘(アハセミ)ることが必要であるが、名義抄は覘を(ナラヒル)と訓ませている。

慣ラフの効果は慣ルであるが、慣ラフには効果の一面面としての親密化を意味する用例がある。竹取物語(880年)の「歳ごろならひて」・「遊びきこえてならひ奉れり」等がそれである。

(1) 慣ル

万葉の「奈流留麻爾末仁」(35/76)や新撰字鏡(900年)以下字鏡

の訓注「鬚奈礼」や古今集の「なるるを人は厭ふべらなり」(752)等は、慣ル(自動詞下二段活用)の活用、また万葉の「奈礼波不益」(30/48)は慣ルの名詞形である。「(衣が)朝且穢者雖」(万葉623)の慣ルは、それが同一行動(同一衣服)の反復効果であることを端的に示している。このような慣ルは、同一行動の反復効果として、他に対する平気・平常・平坦な態度での適応を阻害していた抵抗感・疎外感・異物感等の障壁が解消して適応が平滑となること、さらには、対象との関係が平坦化・親密化・精神的一体化することを意味する。

上記の慣ルは平坦化の、霊の「其女媚壯馴之」の訓注「馴奈ツ岐」(三)は親密化の、万葉の「名付西奈良乃京之」(10/49)は精神的一体化の好例であろう。ナツクは「慣レ+ツク+レ」か「慣+ツク」か未詳である。この慣ツクは自動詞・四段活用であるが、「(鶯を)奈津氣牟得」(万葉837)は他動詞・下二段活用である。

(2) 慣ラス・馴ラス

慣ラスは慣ルから転成した他動詞・四段活用である。源氏の「のたまひ戯れなどしてならし給へれば」(末摘花)は平坦化、十訓抄(1252年)の「晴に出でて人をならし」(二)は親密化するように慣ラスことである。紀の「得_馴而能_従人。…乃授_酒公。令_養訓。未_幾時_而得_馴」(仁徳43年)は、全部をナラスの活用として訓めぬことはない。馴ラスとは、調教という同一行動の反復効果により人間と動物との親しい交渉を阻害する野性という障壁を解消させ、人間に対する態度を親密化させることである。

(3) 平ラス

紀の「時官軍屯聚而踏_阻草木₁。因以号₂其山₁曰₂那羅山₁。踏_阻。此云₂」(崇神10年)は、ときに「平山」(万葉28)とも記されている。このナラスは、「多知度奈良須母」(万葉3546)・「大宮人能踏_平之通_之道者」(万葉1047)と同様に、地表を平坦化することであった。この平ラスは、踏むという同一行動の反復効果により灌木や地表の凹凸という交通・農耕等の障壁を解消させ、地表を平坦化することである。「毛無乃岳」(万葉1466)は「奈良息之岳」(万葉1506)のことであった。ebnen(平らす)が Schwierigkeiten ebnen となると「困難を排除する」を意味することが想起される。

かくして、平ラスは、その原義一同一行動の反復効果

により主客間の障壁を解消させる一において慣ラス、馴ラスと同一であり、用法において地表との関係の枠内に限定されていた、と言える。初めに、慣ルが風土への適応、慣ラス・馴ラスは騎馬の調教、平ラスは農耕のために荒地を平坦化すること、を意味して用いられたとすれば、戦後史学が日本古代史の形成者として推定する騎馬民族の倭国への定着過程と対応する。

2.2.2 習ラフ

狭義の学習にせよこれを意味する真名は紀に多く見られる。しかし、広義の学習であってもこれを意味するナラフの語の確実な初見は紀の成立より200年も後の古今集の「ものならはし」(前掲)である。ナラハス(他動詞、四段活用)は習ラフ(他動詞、四段活用)の使役形である。してみれば、習ラフは前述の效ラフ・慣ラフ・慣ル・慣ラス・平ラス等よりかなり新しい語である。漢籍・仏典の学習体験があって初めて成立した語であろう。

習ラフを、知覚運動学習・知識学習・態度学習に大別すれば、前掲の「学」(神代紀、一書)や「(琴の)かたき調子どもをただひとりならひとり給ふ」(源氏、紅葉賀)は知覚運動学習、前掲の「習」(推古紀、元年)・「ナラフ」(愚管抄、七)等は知識学習、正法眼蔵(1231~1253年)の仏道を「ならふといふは自己をならふなり」(現成、公按)は態度学習である。上記の技巧学習と態度学習には nachahmen, 知識学習には erlernen が近い。なお、上掲の「自己をならふなり」は「自己をわするなり」であって、他の習ラフが有の撰取であるに対して、無への捨身である。習ラフの語の最深義を示すものであろう。

以上によれば、習ラフは、まず習ラフ対象であるものに違うこと、すなわち手本に似るように行動することである。ここでいう手本は、独乙語では Muster よりは Vorbild が近い。範型と言ったほうが適切であるかも知れない。無への捨身ですら「仏祖の行履」(随聞記、二4, 三7)が範型であった。態度学習以外は、慣ラフと異なり反復を必ずしも要しない。しかし、習ラフは「もの」の認識と行動の仕方の習得を必然的に期待される。そうでなければ、訓注「下效レ此」や「なかまろをもろこしに……つかはした」(前掲)ことは無意味である。

2.3 マナブ

紀の「学、外典於…」(前掲推古、元年)や「送、書生三四人、以俾レ学、習於観勒矣」(推古紀、10年)の「学」を、日本本はマナブあるいはマナビと訓んでいる。名義抄では、学の訓にナラフ、マナブのほかマネブがある。マナブは、今

日の国語学では、ナラフとほぼ同義、発生的にはマネブと同根でマネ(真似)からの転成語と考えられている。表1に示す效の訓は上記4語の関係の反映であろう。マナブの原義の検討はマネから着手されなければならない。

表 1

	霊	名 義 抄
ナラフ	效	效 効 倣
マネ	效	
マネブ	效	效
マナブ		倣

2.3.1 マネ

武内宿禰に代って似せの死体となった真根子の自決は、「形似大臣」(応神紀、9年)を自認しこれを利用することであった。マネ(真似)はニ(似)ていることが基本である。マは真実を意味する接頭語、マネの動詞はマヌ(他動詞、下二段活用)で、その語幹のヌはネ・ネ・ヌ・ヌル・ヌレ・ネヨと変化する。字鏡は「似」を類也・像也と解し、名義抄はニルを似・肖・如・若・類・像、等の訓としている。したがって、甲が乙に似るということは、甲が乙のあるもの(原像、乙')を、甲のあるもの(甲')において写像していることだ、と言える。この写像に歪みがない場合に、人は甲に乙の像を見て甲は乙に真にニル(似・肖)、甲は乙のゴトシ(如・若)と感じ、また甲と乙の類同性を認めるのである。

(1) マニ

このニに真実を意味する接頭語マが添えられ、さらに壮大を意味する接頭語フトが冠せられた語がフトマニ(布斗麻邇(記)、太占(神代紀、上一書)、等)であろう。マニは、記伝では「如何なる意にか未々思ひ得ず」(四代、神2)とされている。私見によれば、不満の意を祟りとして演出・表示した神の正体、真意が不明の場合に「何神之心」(垂仁)を知るために、司祭(甲)が神(乙)の真意(乙')を獣骨に写像させた「火垢」(倭人伝、甲')がマニ(真似)である。マネ(真似)はこれが転化したものであろう。なお、私見によれば、火垢等をマニと断定すること、すなわち心証を照合させることがト合(神代紀、上一書)・ト相(記、上)・占相(垂仁)である。ウラへのウラは心(万葉1507, 1743, 3180, 8500等)、へはアへの約音で「令合」(記伝四、神代2)の意であろう。

(2) マネ

マネの初見は、紀の「真根子」でなければ、霊の訓注「效^万称^(中)」(五)である。また「真似^真」の初見は源氏の「人真似に心を入る事もあるに」(常木)であろうか。霊のマネは、眼前の鶴鶴の行為を学^{ナラ}った二神のように甲が乙の行為を甲の行為において写像するのではなく、脳裡に描く「翳苦之状」を学^{ナラ}った兄尊のように現実的行動から抽出された定型を演出することであった。マネの対象には具体的事実と社会的定型とがあったのである。なお、霊がマネに「效」を当用したことは、霊の「效^奈良^(前)比^天」(掲)や記紀の「效^此」と同様に、先(乙)に後(甲)が似ていることが基本だ、ということの反映である。二神や兄尊の場合の「学」はマネが行為の基調であった。紀における「学」のこの用法は、世阿弥の「物学」(後述)の先駆であろう。

万葉には、マネの語は見出せないが、ニルはニツク(似付)をも含めて多数の用例(344, 425, 1503, 4197, 771, 2572, 等々)がある。いずれにも似の字が当用されている。マヌには、「この松の名をまねたれば」(紀貫之歌集)の950年頃のごとき用例がある。

世阿弥の芸道論における能の美学的原理としての幽玄主義と並ぶ写実主義を支える「物まね」(花伝書風姿二世子)は、「物学」(同前)・「物真似」(同前)とも記されるが、この「学」と雖も前述のマネの概念の外にあるのではない。しかし、この「学」は、表面的な写像ではなく、豊かな教養と厳しい稽古により初めて対象の本質に迫る写実であった。マネのもっとも洗練された、そして真似の字義にもっとも忠実なマネであった。

2.3.2 マネブ

マネブはマネからの転成語(他動詞)で、その初見は霊の「效^万比^(上)」(十九)である。霊では「乞者来、読法華経品而乞^レ物。沙称聞^レ之^レ軽映^レ昏、故^レ候^レ己^レ口^レ訛^レ音^レ效^レ誑」という意地の悪い口マネをすることであった。

蜻蛉日記(954~974年)の「みどりこの絶えずまねぶも」(上)や枕の「(おおむは)人の言ふらむことをまねぶらむよ」(41)は、単純な無意図的・反射的模倣である。源氏の「所につけたるものまねび」(手習)は模倣遊戯、「この夢合ふまで、また人にまねぶな」(若菜)、「御方方の有様、まねびたてむも言の葉足るまじく」(初音)は、見聞の記憶に基く無意図的・衝動的・回想的模倣、「ありぬべき方をばつくりひてまねびいだすに」(常木)は分別が真実性を歪める意図的、回想的模倣である。これらに対し

て、「文才をまねぶ」(乙女)は模倣ないし理解学習で、意図的修得学習に属する。

これらのなかでは、意図的修得学習としてのマネブがもっとも新しくまたもっともマナブに近い用例である。しかし、どの用例もマネの基本概念を失ってはいない。回想による模倣は、語り手(甲)が世間(乙)に発生した事態(乙)を語り手の見聞放送(乙)において写像することであり、意図的・修得的学習は学習者(甲)が社会(乙)の定型的な技術・知識(乙)を自己の技量・学識(甲)として自己に写像・定着させることである。このようなマネブはもはやマナブと異なるところはない。

なお、今日の我々が「De Imitatione Christi」・「基督のまねび」・「古仏のまねび」等のマネビを平安期のマネビの意味よりさらに深い意味において受容できるのは、道元によるナラフの意味、世阿弥によるマネの意味の掘下げがあったからであろう。

2.3.3 学ブ

マナブと訓んでおかしくない真名は紀に少なくないが紀の撰上当時マナブの語が既に存在していたという確証はない。名義抄がマナブと訓ませた字は学・導・倣・働・嗜、等である。字鏡は、效や嗜を「学也」、学を「識也」としているが、訓は施していない。これでは、字鏡の時代にマナブの語が既に存在していたのか未だ成立していなかったのかを確認できない。マナブの語の存在が確認されるのは平安中期以後である。

源氏の「わざとならひまなばねども」(常木)・「年頃まなび知り給へる事どもの深き心」(橋姫)は修得学習である。千載和歌集(1187年、序)の「此の頃の道をまなぶることをいふに、唐国・日本の広きふみの道をまなびず」のマナブは上二段活用である。鎌倉期に入ると愚管抄の前掲のごとき用例が見られる。そこでは、マナブは学スやナラフとともに知性による理解学習(「智解」)であり、その対象は内典・外典に示される客観的な Norm である。また、従然の学ブは、これに先立つ随聞記の「学道ノ人モハジメヨリ道心ナクトモ只強テ道ヲ好ミ学セバ」(日文5本)の「学ス」と同様に、その対象は当時の Norm のひとつとしての仏道であった。従然の「伝へて聞き学びてしるはまことの智にあらず」(38)は、さきのマナブが自動的な erlernen であったに対し、受動的な von jm lernen である。「仮りにも愚を学ぶべからず。……驥をまなぶは驥のたぐひ、舜をまなぶは舜の徒なり。偽りても賢をまなばむを賢といふべし」(85)は、私淑の意味

を含む模倣学習 Nachahmung に概当するかも知れないが、ある存在を Norm としこれを修得して自己をそれに同一化しようとする態度学習でもある。また、花伝書の「申楽延年のことわざ、其源を尋ぬるに、……其風をまなぶちから及びがたし。されば、古をまなび」（序）は、「稽古」（序）・練習する üben, sich schulen ことを意味するが、実は前述の「物学」の仕方をマナブ studieren ことであった。

このような学ブは、その過程の低次元にマネ・マネビのある側面を持っている。しかし、マナブの基本は、対象を理解・修得・把持することにある。この点で一過性のマネ・マネブと異なる。学ブはマネの反復すなわちナラフをその基礎に持つのである。

2・3・4 愛 ブ

(1) 愛

万葉に「父公爾 吾者真名子叙 妣刀自爾 吾者愛兒叙」(10/22)とあるように、マナは愛とも記され、「愛らしい」を意味する形容詞である。この用法は、催馬楽(808年頃)の「大領の愛娘」(我)等を通じて今日に伝わり、愛弟子のごとき新語もある。名詞化すれば「麻奈登伊布兒我」(万葉/340)のごとく、甲が「愛らしい」と思う対象乙を意味する。このマナのマはマニ・マネのマ、ナは「那波伊布登母」・「那遠岐豆」(記上)・「籬虚曾波」(仁徳紀/50年)のナで汝を意味する。なお、「愛」は「愛我那勢命」・「愛我那邇妹命」(記上)のごとくナを美称することもあつた。

「愛」には、「天皇愛之」(欽明即位前紀)・「為愛養兒」(継体紀/8年)等のごとき動詞的用法もある。それらの訓は種々あるがマナブは見当らない。字鏡には「惜也・傷也」とあるが訓はない。また、名義抄には収載されているが訓釈は空白である。

(2) 愛ガルと愛ブ

記の「栲綱の白き腕 淡雪の若やる胸を そ叩き叩き 麻那賀里 真玉手玉さしまぎ」は、沼河比売の歌であるが、須勢理毗売の歌では、①が②と③の間にある。このマナガリは、記伝によれば、「組貫→拱→マヌク→マヌカル→マナガリ」と変化した語で、「互に手を差交し抱く」を意味する(十一/神代9)。この説はかなり支持されている。しかし、マナガリ以外は古語には見出せない。クミには「能知母久美泥牟」(雄略/記)、ヌクには「竹玉乎繁爾貫垂」(万葉/379)のように用例があるが、クミヌクとい

う用例は古語にはない。マナガリを時典が「未詳」としたのは当然である。

私見によれば、マナガルのガルは、カルと同様に、形容詞の語幹または名詞に接尾して四段活用の動詞を造る接尾語である。万葉には「ツナ(綱)一ナ」+ガル→ツガル(1767/4106)・「ムラ(群, 3418/3530, 等) +ガル→ムラガル(33/26)」・「イブ(2236, 2720, 3106) +カル→イブカル(訝かる/1753)のごとき造語過程の痕跡がある。マナガルが「マナ+ガル→マナガル」によって成立したと考えてもおかしくない。

後世のガルには、「月をあはれがり」(竹取)のごとく「…のように感じる」と、「才がらず」(源氏初音)のごとく「…のふりをする」とがある。マナガルの場合は「…を行為に表現する」であろう。したがって、記の歌中では、語意は「可愛いがり」であるが、行動面では「愛無し」と解すべきであろう。①が②と③の間にあっても、このほうが記伝の説よりも文脈を崩さず、④との関係も明快になるであろう。

マナがマナガルに転成するならば、「あはれ」が「あはれがり」(前掲)と「あはれび」(古今集序)に、「かなし」が「かなしがり」(大鏡, 11C)と「かなしぶ」(古今集序)に転成したように、マナが他方でマナブと転成してもおかしくない。万葉には「歛寸」(22/73)に対して「宇礼之備」(41/54)、「可奈之伎」(3549/4408)に対して「可奈之備」(44/08)のごとき例があるのである。しかし、「愛」ないしこの種の真名をマナブと訓んだ例は見出せない。これが愛ブの語の存在を措定する私見の弱点である。

2・3・5 マナブ

奈良期以来の学問に対する学習と理解を通じての思慕と愛情の高まりが、平安中期において学問の修得を指すのにマネブではじゅうぶんでないことを感ずるに至って、マナブがマネブに代る語として出現した。この頃、学問の修得を意味する真名はほとんど学と習に整理され、マネブには主として学の字が用いられた。名義抄がマネブと訓ませた真名は学と効だけである。

上記の私見に基き仮説をたてれば、マナブは、短期間に、学の字を尊重して愛の字と袂別し、学の訓からマネブを追放してこれと代替した。したがって、マナブは愛ブという用例を遺す暇がなかった。そして、マナブが学の字を採択したとき、学の字が夙くから荷っていた習ラフという意味と、マナブの語を生み出した学問への思慕と愛情が吹きこめられた。

なお、マナブのナは、前述のごとく、もと二人称代名詞であった。したがって、マナブの原義は、我に対する

汝としての対象を愛することではなければならない。学ブの対象は、マネブの対象と異なり、まず、内典・外典に記載されている Norm としての知識であった。かくして、学ブは、なによりもまず、知識を愛することであった。

これは、嘗て学問一般を意味した *philosophiā* の原義が愛知であったことを想起させる。嘗て「年魚市」(万葉271, 1163) (景行紀51年)とも記された地名「阿伊知」(倭名抄5) (尾張国)が「愛智」(同前)と記されるのは、和銅6年の詔「諸国郡郷名着₂好字₁」(統紀)によると推察されるが、「愛智」の字の選定の背景に、マナブ(愛知)の語の成立事情の先駆を見出せないであろうか。なお、霊はこの地名を「阿育知」(上三)と記している。

内典・外典の知識は学問することによってのみ修得される。したがって、マナブはやがて学問をすることを愛するという意味をも持つに至る。前掲の「愛₂於学₁」(敏達紀)の記事が想起されてよい。

3 智と知

3.1 チ

紀の「(皇子)生而能言。有₂聖智₁。及_レ壯₁兼知₂未然₁。

且習₂内教於₁。学₂外典於₁。並悉達矣」(推古元年)では、智は未然認識や学問成就の先天的条件としての知的素質として、霊の「(禪師)得度精勤修学。智行雙有」(上28)では、智は後天的条件による知的性能として捉えられている。紀の記載は「(思兼神)有₂思慮之智₁」(上一書)等とともに「智」の単独名詞的用例の初見である。しかし、上記の「智」が紀の撰述当時に「河内国大県郡乃智識寺」(統勝紀天平)や「信女さとりをひらきし、これ智によらず」(眼蔵弁道話)のごとくと音読されたか否かは確実でない。

霊の「(太子)天生知」(上4)・「(優婆塞)生知博学」(上28)を日本語は「うまれながらしり」と訓ませている。シルは他動詞であるが、この文章には「知」の対象がない。したがって、この知を先天的の知的素質と解して、「うまれながらにして知ありと訓むべきであろう。優秀な知的機能の素質を意味することは言うまでもない。問題なく知の単独名詞的用例と認められるものの初見は、紀の「何死人之無_レ知耶」(仁徳紀55年)であろう。しかし、これらの「知」が撰述当時に「皆悉加₂入其知識₁」(霊下35)や「我が知を取出でて人に争ふは」(徒然167)のごとくと音読されたか否かの確証はない。

上記の紀と霊の引用文から、当時既に学問に関する「①先天的知性→②知的学習→③後天的知性」の図式が捉えられていたこと、智・知は③のみならず①に対しても用いられていたことが分かる。問題は②に対してどう用いられていたか、である。

智・知に対して、字鏡は字義のみを示している。その字義を示す字と智・知に対する名義抄の訓を表示すると表2のごとくである。

表 2

	字鏡	名 義 抄		
	字義	形容詞	動 詞	
智	哲也 知也	トシ サトシ サカシ	智	サトル
			哲	サトル
			知	シル
知	識也 覚也		識	サトル シル
			覚	サトル シル

3.2 サトル

3.2.1 トシ・サトシ・サカシ

紀は厩戸皇子の尊称として「聖徳」のほか「豊耳聰」(用明即)、「豊聰耳」(同推古元年)を記している。この「聰」に関する霊の訓注「聰_止」(上4)は釈紀の傍訓「豊聰耳」(秘訓四)を保証する。このトは、知性に関する形容詞の語幹と見れば、万葉の「利心」(24/00)・「鋒心」(28/44)・「力其己呂」(44/79)のトと同じである。このトは、霊の訓注「鋸_止」(上5)をも参照すれば活用であることが分かる。万葉の「諸刃利」(24/98)・「荒足鴨疾」(11/01)はク活用の一例である。名義抄によれば、トシに当用された字は智・聰・利・疾のほか慧・俊・哲・迅・速・等々である。語幹のトは「砥_{均也}」(字鏡)に見られるようにもと動詞の磨グのトと同じで、トグは万葉では「剣刀磨之心乎」(33/26)・「真十鏡磨師情乎」(61/9)のごとくと心を錬磨するの意味にも用いられている。

紀の「天皇生而明達」(神武即位前紀)を私記丙本は「佐止師」と訓んでいる。このサを「情佐麻彌之」(万葉82)と同様の接頭語とすれば、サトシはトシからの派生語であり、「大夫之聰神毛」(万葉2907)はそのク活用である。しかし、トシが心性のほか剣や嵐にも適用されるに対し、サトシ

は知性にのみ適用されている。こうえ考えれば、「(阿礼) 為人聰明」(記序)、「(天皇) 識性聰敏」(崇神即位前紀)・「(百襲) 聰明叡智。能識未然」(崇神紀)・「(天皇) 幼而聰明叡智」(仁德即位前紀)等は、「叡智」とも脱合せなければならぬが、まずサトシと訓んでもよい文字であろう。名義抄においてトシともサトシとも訓まれた字に智・聰・慧がある。

上記の聰敏と叡智は日本文ではサカシと訓まれている。サカシの初見は記の「佐加志表衰……久波志表遠」(上)である。意味は「賢遺能之莒里」(仁德紀)・「因曰賢女郡。今謂佐嘉郡訛也」(肥前國風土記)・「儒之久」(靈上序)等から想像できよう。

私見によれば、サカシのカシは「吾屋榿城尊」・「吾屋榿根尊」(神代紀上)・「阿夜爾可斯故斯」(万葉813)や「伊賀志乃御世」(出雲國造神賀詞)・「茂世」(中臣寿詞1142年)・「嚴矛此云伊箇」(舒明即位前紀)等の語幹と同一で、サヤイは接頭語である。カシの原義は、非凡・強大・神聖で、独乙語では ehrfurchtsvoll がこれに近い。こういう存在に対する緊張・恐懼の感情の形容詞がカシコシ、その存在の性状の形容詞がイカシであって、サカシは非凡・強力な知性の形容詞である。

紀の「兄磯城黠賊也」(神武即位前紀)は文中では「悪賢い」を意味する。この字を私記丙本は佐止支、字鏡は佐賀志、佐止留。名義抄はクロシ・カシコシ・サカシ、等と訓んでいる。なお、名義抄がサトシともサカシとも訓んだ字は智・慧・俊であり、サカシとだけ訓んだ字は賢・哲・儒・傑・點・詰、等々である。サトシとサカシの相違は、サカシがサカシラ(万葉350)・コザカシ(源氏若菜)等のごとく非難に値する行為・性情を表現する言葉の語幹にもなるということである。

3・2・2 サトル

サトルは、私見によれば、サトシからの転成語である。その過程は、「茂く(万葉29)→茂り(万葉431)・「重き(万葉897)→重る(万葉2469?)」・「直き(統紀宣命)→直る(延喜式)」等と同様に、「ク活用の形容詞の語幹→動詞(ラ行四段活用)」である。サトルは万葉には見られない。したがって、その転成は万葉時代以後のことであろう。記録には後世の傍訓サトルが似合いの文字は少なくない。しかし、記紀にはサトルの訓注や仮名書きは存在せず、サトルと訓まれたか否かの確証がない。サトルの確実な初見は、字鏡の慧・僚・認・誌に対する訓注「佐止留」で

ある。したがって、「サトシ→サトル」の転成は、記紀編纂から字鏡撰述までの期間と考えられる。原義は、サトク…を知る、サトキ知性により…を知るということであろう。

この転成の推進力は仏典の学習・訓釈であろう。当時の仏典学習の水準から推せば、縁起・中道・四諦・八正道等の概念の構造連関や、「智」が六波羅密のひとつで五波羅密を円満して初めて啓開される最高理性(智慧・般若)であること等の認識は、知識人の共通的教養であったと考えられる。そうでなければ、記の「(天武) 智海浩汗、潭探上古、…明規先代」(序)や紀の「(百襲) 聰明叡智。能識未然」(前掲)・「(皇子) 生而…有聖智、及壯…知未然」(前掲)のごとき、天皇・皇族の聰明さに関する「智による未然認識」の記載の定型化は理解できない。

この「智」をサトキ知性とする解釈が、これによる未然認識に対応する動詞としてサトルを押出したのであろう。しかし、サトルの対象は、未然であるよりさきに、平家物語の「過去未来の因果を兼ねて悟せ給なば」(流布本、万、灌頂)に示されるように、過・現・未の関係の理法としての因果、総じて「余能奈迦波 加久曾許等而里」(万葉800)

にも見られるごとき世のコトワリでなければならない。だから、サトルは有形の事物の認知には用いられず、無形の事柄の認知に対してのみ用いられるのである。名義抄がサトルと訓ませた字は60個に近いが、そのほとんどが聰・智・慧・識・解・通・達・観・覚・醒・悟、等々に見らるごとき系統の字であることから想像されるごとき、サトルは感性的認識よりも理性的認識に当用される言葉である。ここに重点が移行すれば、サトルの古義はコトワリを知ることであった、と言えよう。源氏の「三史五経の道々しき方を明らかに曉り明かさむこそ」(帚木)はその一例である。

3・3 シル

3・3・1 知ル

記紀歌謡に見える「斯良受登母伊波米」(仁德記)・「辞羅儒等茂伊波米」(仁德紀30年)は、認識を意味するシルの活用(他動詞四段活用)である。このようなシルは万葉にも多く見られ、記紀・万葉を通じて知の字がもっとも多く当用されている。字鏡には知をシルと訓注した例はないが、名義抄には知のほか識・察・慮・覚・悟、等の例がある。なお、字鏡には「認志留。又佐止留」のような訓注や「知覚也」

のような注もある。

この様な知ルの意味および文脈に応じた使い分けかたは、記紀、万葉においてじゅうぶんに展開されており、独乙語では wissen と kennen とを合せた概念がこれに近い。すなわち、知ルは感知・認知・察知・理解・推察・精通・既知、等を意味する動詞である。なお、延喜式祝詞(以下祝詞)の「物知人」(龍田風神祭)や宣命の「知物人」(天平勝宝元年)のモノシリビトは、博識者ではなく、「神乃御心」(前掲宣命)をマニを通じて知ル(心証を照合し)人のことである。

知ルには「知られる」を意味する用法(自動的)がある。万葉の「己我当乎 人爾令知管」(46)がそれである。また知ラス(他動詞)は通報することを意味する。

3・3・2 治ルとウシハク

(1) 治ル

紀の「故令₃下治₂根国₁」(神代紀上一書)・「可₃以治₂…₁也」(神代紀上一書)や記の「(歴代)治₂天下₁」は、記の「那賀美古夜 都毗爾斯良牟登」(仁徳記雁卵)と同様に、領有・統治・領知を意味するシルの活用(他動詞)である。仁徳記が知ルおよび治ルの未然形をとともに「斯良」と記載していることは、両語の同根性の反映であろう。

治ルに知の字を当用した例は、万葉の「高知座而」(38)、祝詞の「千木高知」(春日祭・平野祭)等々がある。漢字の「知」は「知事」(天武紀2年)・領知に見られることき意味を有するから治ルに当用されてもおかしくない。万葉には「早知而 標指益乎」(13)のごとく占領・領有を意味する例もあるのである。

なお、治ルから派生したシラス・シロスは敬語で、多く「所知」と記されている。記の「汝命者所_レ知₂…₁矣」や万葉の「天所知流」(20)はその一例である。シロスには訓注「所知食(古語云志呂)(祝詞)大殿祭」がある。また、万葉の「聖」(33)は「日知」(29)と同じくヒジリと訓まれているが、その意味は「高日所知奴」(20)から推察されよう聖人の原義は日治であった。

(2) ウシハク

記の「汝之字志波耶流葦原中国者。我御子之所_レ知国」(上)においては、治ルはウシハクより高次とされている。ウシハクのウシは「三熊之大人(此)(神代)の字志である。字志のウは「宇麻(馬)」(万葉4122)・「宇美

(海)」(景行記)のウと同様に大を意味する。シは「宮主」(延喜式神祇一)・「衢羅眞」(神武即位前紀)・「刀自」(万葉723)・「都自」(允恭紀2年)・「度珥」(天智紀9年)「伊戸乃止之」(靈上2)の家室の訓注)のジないしシと同じで、神主(崇神記神功紀)と同様の宮主・倉主・戸主のヌシの約音である。このヌシは主宰する人を意味する。

しかし、万葉に見えるヌシは「阿我農斯能 美多麻多麻比豆」(88)や「夜都故等曾 安礼波安利家流 奴之能 等能等爾」(41)のごとく、大人と同様に、対象ないし自己が関係する人への尊称である。してみれば、シとヌシは、独乙語では Herr がもっとも近い語であり、ウシに対応するのは Herrscher であろう。

ウシハクのハクは「伊豆毛多耶流賀 波耶流多知」(景行記)のハク(他動詞)で、ものを身に着けることないし所持することを意味する。したがって、ウシハクは宰領することを意味し、独乙語では herrschen がこれにもっとも近い。なお、私見をたてれば、治ルは上記のシが「雲(万葉17)→雲(万葉3310)・「Herrsher→Herrshen」と同様に動詞化したものである。したがって、治ルとウシハクはシにおいて同根・同義である。

3・3・3 知ル—再考察—

治ルは宰領・領知することであった。治ルためには対象を把握認識することが必要である。対象の数量的認識手段としての Statistik は、Staat の Herrscher の要求から出発した。認識要素としての概念を意味する Begriff は、対象物の把握を意味する greifen から転成した語である。知ルは治ルから派生したとしてもおかしくない。知ラス(通報)に対する「領為」(万葉3809)、知ルに対する「委」(靈上5)の当用は、派生の中間過程の残映であろう。

竹取には、シルから派生した癡ル(自動詞)が心地唯癡れに癡れて」と用いられている。源氏の「子の大人ぶるに、親の立ちかはり癡れ行く」(乙女)の先駆であろう。この癡ルは、知性の機能が主体以外の何ものにか占領・把握されるとか、知性の底が容易に察知される程に浅薄になることかは未詳である。しかし、このこと自体が知ルの原義が対象を知性において把握することだ、ということを示しているのではなからうか。英語では grasp, 独乙語では begreifen がシルの原義にもっとも近い。

参 考 文 献

- 1) 法隆寺東院縁起(高楠順次郎・望月信亨編, 大日本仏教全書, 有精堂, S17)。
- 2) 上代語辞典編集委員会編, 時代別国語大辞典, 三省堂, S 42。
- 3) 守随憲治・今泉忠義校閲, 古語辞典, 旺文社, S35。
- 4) 江上波夫, 騎馬民族国家, 中央公論社, S42。
- 5) 護雅夫, 遊牧騎馬民族国家, 講談社, S42。
- 6) 能勢朝次, 世阿弥十六部集評釈上下, 岩波書店, S15, 19。
- 7) Thomas a Kempis, De Imitatione Christi, 1441. S15,
- 8) ア・ケンピス, 内村達三郎訳, 基督のまねび, 春秋社, S21。
- 9) 高崎直道, 梅原猛, 古伝のまねび〈道元〉, 角川書店, S44。

Original meaning of the
Japanese old words which mean learning

Toshio Kimura

Abstract

The Japanese old word—narahu (習フ), manebu (真似ブ), manabu (学ブ), satoru (悟ル), shiru (知ル)—means “learn”— in the wide sense. This article is the philological and etymological study of these words. But the aim of this article is to offer the problems and the suggestions for the psychological investigations of imitation, practice, learning, cognition, apprehension, and etc. Clarified original meanings are following.

narahu: to follow the object, to take after the exemplar.

manebu: to reflect the object on oneself.

manabu: to love the object.

satoru: to comprehend the object prespicaciously.

shiru: to grasp the object.